

【展示批評】 特別展「原市場村秘史～受け継がれる記録と記憶～」

特別展「原市場村秘史～受け継がれる記録と記憶～」を見学して、展示に関して若干のコメントをしておきたい。

飯能市立博物館は、これまで地域の課題や歴史・文化について地域博物館としての活動を意欲的に実施してきた。近年の他の博物館特別展のテーマ設定は、ともすると地域と向き合わずに、集客を目的とした内容などが取り上げられることが目につき、本来の地域博物館のあり方を考え直さなければならぬと感じていた。

先年朝霞市博物館で開催された特別展「はまさき」や蕨市立歴史民俗資料館の特別展「塚越は熱い」などは、市域の大字を扱った特別展であったが、土地の成り立ち、地域的特性など様々な切り口から興味深い展示で、市民からも好評であったと聞く。昨年の当館の特別展「天覧山」も自然や地形ばかりではなく、様々な角度のアプローチを試み、同行した小学生の孫も面白かったと感想を述べ、その喜びのまま天覧山に登ったので感動の継続が得られた。

このような状況下、今回の特別展は、地域を題材としたテーマについて博物館としての使命を果たすため、「原市場村」という最適な題材で、ポスターデザインも、秀逸といえ、大いに期待していた。

ただテーマが良い展示だっただけに、少々辛口のコメントになってしまうが、今後の博物館活動のために、展示順を追って感想を述べておきたい。

まず、タイトルにある「秘史」であるが、何が秘史？ 図録の館長挨拶文には、その理由といえる一文があるが、今まで知られていなかった、語られてこなかった「秘史」の部分が、理解力の乏しい私には正直わからなかった。記録と記憶が何故秘されてしまったのか、その発掘成果を表現した展示だというのだろうが、見学者にその情報を知らせる努力が不足していたと感じたが、実際に見学者はどう感じたろうか。集客を狙ったキャッチコピーとしての意図ならば、成功だったのかも知れない。

私自身「原市場」には不案内なので的外れであるかもしれないが、飯能市域は古くから人々の活動が活発な地域で、特に中世に注目していたが、展示では中世の営みの展示が、蔵骨器だけであった。板碑などの文化財が残されているのではないかとと思うが(図録の第2章口絵には写っている)、残念ながら展示されていなかった。せめて写真パネルなどでも、中世の姿を表現して欲しかった。

展覧会で私の最大の関心事であった、「原市場」の起源について。本来、地名の起源は、地域を扱う上で最低限必要な情報であるが、残念ながら全く言及がなかった。展示解説を拝聴したが、そこでも江戸時代からあるという程度でほとんど触れられなかった。地名は、そこに暮らした人々の生業など営み、自然環境から生まれるので、何故「原市場」となったのか、「市場」というからには市の活動、文献上確認できる最古の史料、日影村からの分村経緯や郷帳、風土記稿の記事などで、村況などを紹介し、丁寧に説明すべきであった。近世村の土壌があつて、近代の村があるのであって、

明治以降までは、飛躍しすぎであった。合併でも、他の地域を冠する動きがあったのが、何故原市場村になったのか、これこそが「秘史」ではないだろうかと感じた。図録のコラム3も、地理的要因だけなのだろうか。

おそらく明治以降の原市場村に展示の力点を置いたのだろうが、私自身の経験から行政文書の列挙は、一般の人たちには面白みがない。研究者などには、最高の史料であるが、内容が次頁にわたるなどあり、情報が散漫になる。今回も表紙だけの展示で、キャプションの説明も不十分であった。背面の解説パネルを読めばある程度理解はできるが、デザインに凝りすぎて文字がモノクロ写真の上にあるため、文字が読みにくかった。今後は、高齢者や弱視者へのユニバーサルを意識した方がいい。

音響コーナーも、面白い取り組みでいいが、如何せん23分は長すぎると思うし、すべて聴く人は何人いるだろうか。一人の人が聴いていると、1台しかないのだから次人は聴くことができないので、かえってストレスとなり不満を持たれてしまう。いい取り組みなので、時間を2〜3分程度で短く、あるいはオープンで聴けるようにした方がいい。ただ、後の獅子舞映像音響との兼ね合いで音の反響を考慮する必要はあるが。

今回で感心したのは「地図で読み解く原市場」である。透明アクリル板で、地域の変遷がわかるアナログ的な手法であるが、地図の手作り感があっていい。先行する館があるかもしれないが、今後他の博物館でも地域展を開催するうえで参考となる装置である。

また、紹介された昭和38年の民俗緊急調査カードは、秀逸な資料である。埋もれた資料を発掘した担当者の努力に敬意を表したい。当時の飯能市の調査員が、提出用カードと同等なカードを作成していたこと。しかも市が、きちんと保存していたことに驚きであった。展示は、大きな成果である。文化財保護とアーカイブの在り方を見直す好資料である。このカードを元に、展覧会が開けると感じた。

最後は、年表である。年表は、歴史展示を構成するうえで、学芸員にとっては必須な資料で重要である。しかし、手元の資料を全部見せている感があり、誰が見るのかという感想を持った。展示関連部分や主要な出来事だけで充分だし、すべては図録掲載でよいのではないだろうか。あるいはプリントを配布するなども、ありではないか。

さらに残念だったのは、会期当初(何時頒布されたか不明だが)に図録が刊行されなかったことである。様々な理由はあるだろうが、利用者サービスという博物館経営的視点が欠落していると言わざるを得ない。展示図録は、会期中という賞味期限がある。会期終了後も頒布されるが、展示を見た感動を自宅ですらに深く読み学ぶという生涯学習の教材でもある。当初から刊行予定がなく、利用者の要望で刊行することになったのなら、それは喜ばしいことであるが。

末尾に一言。グッドマンの法則にみるように、「不満から利益を生む」のであって、利用者など外部からの批評は、博物館と学芸員の糧になる。一見学者の声として、今後の博物館活動に資すれば幸いである。杉山正司(飯能市立博物館協議会委員)